

漱石初出復刻第三弾

評論、講演など二百余点を網羅—漱石復刻全集三部作完結！

漱石評論・講演 復刻全集

全8巻 監修 山下 浩



ゆまに書房

監修のことば——新たな地平を切り拓くために

山下 浩

漱石初出復刻全集シリーズの出版も三回目となり、これで漱石の初出本文の大部分が復刻されることになる。一回目は朝日新聞へ掲載された『新聞小説』全十一巻（一九九九）、二回目は各種雑誌へ掲載された『雑誌小説』全五巻（二〇〇一）であったが、今回はこれ以外の、評論、講演、翻訳を中心に全八巻、二百点の大口を超える資料群である。この中には通常ではめったに見られない、おそらくは unique copy（一点しか現存しない）とみなされるものも多数含まれている。

復刻の方針はこれまでと同様に、すなわち東京と大阪の両朝日新聞に掲載されたものについては、その両者を詳細に校合、異同の記録にとり、雑誌類に掲載されたものについては、複数部を照合・校合し欠字等の補訂につとめている。

復刻版を製作する一般的な目的は、希少な原典の代用をなすことにあるが、本復刻全集シリーズにおいては、これに加えて通常の全集との併用ないしはその代替、リーディングテキストとしての使用を念頭に置いていたので、初出原典の調査には例外的な手間をかけ、「理想本」（出版物の完成形態）の姿を提示できるよう努力してきた。

しかし当復刻全集シリーズもそれなりのまとまりを見せてきた今、当シリーズ製作の元来の目的が実はもつと別なところにもあったということを告白しなければならぬ。それは、漱石の著作群が、どのようなメディア形態に拠って、どのように編集・印刷され、発表されていたのか、そのありさまを従来のどんな形式の年表や解説よりも一目瞭然に、臨場感豊かに伝える、そのためのいわば「鳥瞰図」を描く試みであった。

「書物史」の研究が世界的規模で充実してきた。従来の「出版史」(History of books)が、メジャーな出版物・出版社等の個々具体的な考察を主たる任務としたのに対して、「書物史」(History of the book)とは、「テキスト」(写本・印刷本・地図・楽譜・その他パンフレット類)の名で総称されるこれらの情報伝達メディアが、人類の歴史上・文化史上に果たしたさまざまな役割(the role of the book in history)を分析し明らかにすることである。英国は、フランスよりも後発でありながら、最近、D・F・マケンジーらの尽力によって、外的証拠に依存し過ぎないフランス的方法の弱点を、同国伝統の「本文書誌学」(textual bibliography)的方法(内的証拠)の導入・併用によって克服し、フランスのロジェ・シャルチエからも高い評価を受ける精緻で完成度の高い書物史を誕生させた。

日本においても、今後こうした高度な書物史を誕生させるべくさまざまな方法論が模索されるであろうが、私は、従前からそのための環境整備の一環として、上に述べたようなコンセプトの復刻版製作を考えていた。貴重な資料の個々及び全体が、製作から受容に至るまで、いかなる有機的交わり方をなして、いかなるコンテキストに置かれているか、これは書物史研究の出発点であるが、この種の情報を少数の研究者に独占させるのではなく、特別な専門的知識を持たない一般読者多数に至るまでに容易に供与できる、そんな文献の必要性を強く感じていたのである。

(書誌学者)

● 全巻構成 ●

- 第一巻 明治二十五年～二十七年
(1892～1904)・総論
- 第二巻 明治三十八年～三十九年
(1905～1906)
- 第三巻 明治四十年 (1907)
- 第四巻 明治四十一年 (1908)
- 第五巻 明治四十二年 (1909)
- 第六巻 明治四十三年～四十四年
(1910～1911)
- 第七巻 明治四十五年(大正元年)～
大正三年 (1912～1914)
- 第八巻 大正四年～五年 (1915～1920)・
漱石著作初出年譜

● 「門」執筆のころ (明治四十三年三月)



※表紙図版・岡本一平画「こたつの漱石子」

読者に提供された

本文の復刻

漱石初出復刻全集三部作の完成を喜ぶ

関口安義

書誌学者山下浩氏は、早くから文学作品の本文とは何かの問いかけのもと、本文批評や校訂の問題に的確な提言を続けてこられた。特に漱石全集の本文に関しては、一家言ある人として知られ、その成果は『本文の生態学』（日本エディタースクール出版部、一九九三・六）などに示されている。今回の山下氏監修の『漱石評論・講演復刻全集』は、すでに刊行されている『漱石新聞小説復刻全集』『漱石雑誌小説復刻全集』に次ぐ試みで、全八巻に及ぶ。明治二十五年五月の『催眠術』から、没後の大正九年七月の『三愚集』に至るまでの二百余点を復刻し、掲載された新聞・雑誌・単行本の総てを、それぞれ複数部集めて詳細に校合・異同を記録したものである。

同じ新聞小説や雑誌小説の初出紙（誌）でも、いくつか集め比較してみると、表記の異同や欠字の問題が浮上することを、山下氏はすでに『新聞小説』『雑誌小説』で実証されてきた。それは当然今回の評論・講演・談話、それに翻訳に及ぶのである。しかも雑誌は扉・奥付、新聞は部分だけでなく、該当紙面全体を掲載するなどして、作品発表当時の雰囲気や再現するように努めている。それは確とした編集方針に基づいての作業であり、そこには膨大な時間と労力と資金が注ぎ込まれている。こうした仕事は、決して一朝一夕に成るものではない。各作品の掲載誌（紙）を一つでも見るにも骨を折るのに、それを複数（『漱石雑誌小説復刻全集』の場合は平均十部）集めるというのは、容易ならざる業である。執念なくしては、達成できない作業である。まさに壮挙と言えよう。

『漱石評論・講演復刻全集』は、漱石研究の一大宝庫となるばかりか、日本の近代文学研究における本文とは何かという課題に、大きな影響を与えるものとなる。さらには個人全集を編集する際にも、よき示唆を与えるものと思われる。「読者に提供された本文」の意味を確かめ、当時の出版形態にそって復刻された漱石復刻全集三部作の完成を喜びたい。

（文教大学文学部教授）

雑踏のなかの漱石

紅野謙介

漱石は「第一談話筆記といふものが大概出鱈目なもので、勝手に記者が拵らえて済ふのだから堪らない」と語った。しかし、その言葉自体、「ノラは生るゝか」（『国民雑誌』明治四十五年二月）という「文責在記者」の談話筆記のなかのものであった。果してこの談話は「出鱈目」というべきか否か。たしかに文芸ジャーナリズムの初期において、怪しげな記者や編集者もおおぜい存在していただろう。しかし、そうした胡散臭い書き手たちともわたりあいながら、漱石は生きた。そのことを大事に考えてみたいと思う。

原稿から漱石テクストを構築することが、書齋にこもる漱石を原点として考えることだとすれば、新聞や雑誌などの初出メディアにこだわること、雑踏のなかに漱石を見ようとする試みだと言えるかもしれない。前者がどうしても作者を聖典化するのに対して、後者は近代の活字文化を生きて、俗にまみれることを避けなかった漱石をとらえることになるだろう。まして完全編年体となるこの評論・講演全集は、自筆原稿のあるものも、ないものも同列に、時間的に順を追って配置することになる。もちろん、当時の読者たちには自筆原稿の存在など見えていなかった。創作以外の散文に関していえば、漱石という署名を負った存在は、このような言葉のなから登場してきたのである。

とりわけ批評や講演、談話やインタビューは、うたかたのように消え去る同時代の様々な事象―不透明でおぼろげな現在―に感応しつつ生きた痕跡であり、記者の存在や問い方によって微妙に変化する揺れのある言説でもある。そのテクストが最初に読者の前にあらわれたとき、どのような記事の谷間にあり、どのような形態で、どのようなノイズを伴いながら発せられたか。テクストのヴァリエーションをたどることは、本文を問いかえすことであるとともに、より広い言説空間のなかで漱石受容の進行形の場を探ることにつながるはずである。

（日本大学文理学部教授）

収録内容

(太字は作品名。以下収録誌紙名、) 出版月日。□内は内容を示す。

第1巻 明治25年〜明治37年 (1892〜1904)

〔明治25年〕催眠術〔Enset Hart M.D.〕『哲学雑誌』第6冊第63号 5月〔翻〕／文壇に於ける平等主義の代表者「ウォルト・ホイットマン」Walt Whitmanの詩について『哲学雑誌』第7冊第68号 10月〔評〕／詩伯「テニソン」(オウガスタス、ウーイド) 〔第1回〕『哲学雑誌』第7冊第70号 12月〔翻〕
〔明治26年〕詩伯「テニソン」(オウガスタス、ウーイド) 〔第2、3回〕『哲学雑誌』第8巻第71号、第73号 1月、3月
〔翻〕／英国詩人の天地山川に対する観念『哲学雑誌』第8巻第73号、第76号 3月、6月〔評〕
〔明治28年〕愚見数則『保惠会雑誌』第123号 11月〔評〕
〔明治29年〕人生『龍南会雑誌』第49号 10月〔評〕
〔明治30年〕トリストラム、ジャンデー『江湖文学』第4号3月〔評〕
〔明治31年〕不言之言「ホト、ギス」第2巻第2号、第3号 11月、12月〔評〕
〔明治32年〕英国の文人と新聞雑誌「ホト、ギス」第2巻第7号 4月〔評〕／小説「エイルキン」の批評「ホト、ギス」第2巻第11号 8月〔評〕

〔明治37年〕マクベスの幽霊に就て『帝国文学』第10巻第1号 1月〔評〕／俳句と外国文学「紫苑」第4号 1月〔評〕／セルマの歌・カリックスウラの詩『英文学叢誌』第1輯 2月
〔翻〕／小羊物語に題す十句 チャールズ・ラム著「沙翁物語集」小松武治訳 日高有隣堂 6月〔序〕／英国現今の劇況「歌舞伎」第51号、第52号 7月、8月〔評〕

第2巻 明治38年〜明治39年 (1905〜1906)

〔明治38年〕倫敦のアミューズメント『明治学報』第86号、第87号 4月、5月〔譚〕／批評家の立場『新潮』第2巻第6号 5月〔評〕／近作短評『新潮』第2巻第6号 5月〔評〕／序「ウォルツフォス(ワーズワス)の詩」浦瀬白雨訳 隆文館 7月〔序〕／戦後文界の趨勢『新小説』第10巻第8巻 8月
〔評〕／現時の小説及び文章に付て「神泉」第1巻第1号 8月
〔評〕／本郷座金色夜叉「神泉」第1巻第1号 8月
〔談〕／イギリスの園芸『日本園芸雑誌』第17年第8号 8月
〔評〕／みつまくら『新潮』第3巻第2号 8月〔評〕／序「吾輩ハ猫デアル」上篇 大倉書店・服部書店 10月〔序〕／夏目漱石氏曰「新声」第13編第6号 11月〔評〕
〔明治39年〕予の愛読書『中央公論』第21年第1号 1月
〔評〕／昔の話「日本」1月1日〔評〕／余が文章に裨益せし書籍『文章世界』第1巻第1号 3月〔評〕／序「濛濛集」大倉書店・服部書店 5月〔序〕／文学談片『中学世界』第9巻第7号 6月〔評〕／落第『中学芸芸』第1巻第4号 6月
〔評〕／「夏期学生の読物」『中央公論』第21年第7号 7月
〔アンケート〕／夏目漱石氏文学談『早稲田文学』第8号 8月
〔評〕／文章の混乱時代『文章世界』第1巻第6号 8月
〔評〕／余が一家の読書法『世界的青年』第1巻第1号 9月
〔談〕／文学談「芸芸界」第5巻第9号 9月〔評〕／現代読書法『成功』第10巻第1号 9月〔評〕／女子と文学者「女子時事新聞」第2巻第2号 10月〔評〕／「我國の演劇と演芸」『新公論』第21年第10号 10月〔アンケート〕／人工的感興『新潮』第5巻第4号 10月〔評〕／作中の人物『読売新聞』10月21日〔評〕／自然を写す文章『新声』第15編第5号 11月
〔評〕／文学者たる可き青年『中学雑誌』第2巻第4号 11月
〔評〕／文章一口話「ホト、ギス」第10巻第2号 11月
〔評〕／序「吾輩ハ猫デアル」中篇 大倉書店・服部書店 11月
〔序〕／余が「草枕」『文章世界』第1巻第9号 11月〔評〕

第3巻 明治40年 (1907)

〔物物の批評〕『読売新聞』1月1日〔評〕／将来の文章『学生タイムス』第2巻第1号 1月〔評〕／滑稽文学『滑稽文学』第1巻第1号 1月〔評〕／漱石氏の写生文論『国民新聞』1月12日〔評〕／写生文『読売新聞』1月20日〔評〕／家庭と文学『家庭芸芸』第1巻第2号 2月〔評〕／僕の昔「趣味」第2巻第2号 2月〔評〕／漱石一夕話『新潮』第6巻第2号 2月
〔評〕／漱石先生より 鈴木三重吉著「千代紙」俳書堂 4月〔序〕／「巨匠談片」『東京朝日新聞』4月3日〔評〕／文芸の哲学的基礎『東京朝日新聞』5月4日、6月4日〔譚〕／序「吾輩ハ猫デアル」下篇 大倉書店・服部書店 5月
〔序〕／序 藪野椋十著「東京見物」金尾文淵堂 6月
〔序〕／序 森田草平・生田長江・川下江村著「草雲雀」服部書店 11月〔序〕／序「名著新訳」本間久四郎訳 11月
〔序〕／虚子著「鶏頭」序『東京朝日新聞』12月23日〔序〕

第4巻 明治41年 (1908)

〔序〕「鶉籠」春陽堂 1月〔序〕／愛読せる外国の小説戯曲『趣味』第3巻第1号 1月〔評〕／名家の見たる熊本「九州日日新聞」2月9日〔評〕／「森田草平・平塚朋子の失踪事件について」『東京朝日新聞』3月26日「インタビュ」／創作

家の態度「ホト、ギス」第11巻第7号 4月〔譚〕／「坑夫」の作意と自然派伝奇派の交渉『文章世界』第3巻第5号 4月
〔評〕／「名土と飲料」『読売新聞』4月15日「アンケート」／近作小説二三に就て『新小説』第13年第6号 6月〔評〕／序 松根東洋城撰「新春夏秋冬 春之部」俳書堂 6月〔序〕／「露園」に赴かれたる長谷川二葉亭氏「趣味」第3巻第7号 7月
〔評〕／「倫敦といふ処」「ホト、ギス」第11巻第10号 7月
〔評〕／文章の変遷「江湖」第1年第5号 8月〔評〕／「古今 名流俳句談」序 沼波瓊音・天生目杜南編「古今 名流俳句談」内外出版協会 8月〔序〕／正岡子規「ホト、ギス」第11巻第12号 9月〔評〕／時機が来てゐたんだ『文章世界』第3巻第12号 9月〔評〕／「無教育な文士と教育ある文士」『英語青年』第20巻第1号 10月〔評〕／偉い事を言へば幾らもある『新潮』第9巻第4号 10月〔評〕／文学雑誌「早稲田文学」第35号 10月〔評〕／専門的傾向『国民新聞』10月7日
〔評〕／「小説中の人名」『国民新聞』10月21日〔評〕／「文展評」『国民新聞』10月30日〔評〕／標準の立てかたに在り『新潮』第9巻第5号 11月〔評〕／生地の色、個性の香「新天地」第1巻第2号 11月〔評〕／田山花袋君に答ふ『国民新聞』11月7日〔評〕／独歩氏の作に低徊趣味あり『新潮』第9巻第1号 7月〔評〕／「新年物と文士」『国民新聞』11月20日〔評〕／「文壇諸名家雅号の由来」『中学世界』第11巻第15号 11月「アンケート」／「ミルトン雑誌」『英語青年』第20巻第5号 12月〔評〕

第5巻 明治42年 (1909)

文壇の変異「秀才文壇」第9巻第1号 1月〔評〕／文壇の趨勢「趣味」第4巻第1号 1月〔評〕／一貫したる不勉強『中学世界』第12巻第1号 1月〔評〕／「私のお正月」『明治之家庭』第5巻第1号 1月〔評〕／「文士と酒、煙草」『国民新聞』1月9日〔評〕／小説に用ふる天然『国民新聞』1月12日〔評〕／ポーの想像「英語青年」第20巻第8号 1月
〔評〕／「コントラッドの描きたる自然に就て」『国民新聞』1月30日〔評〕／作家としての女子「女子文壇」第5年第2号 2月
〔評〕／余の希望は独立せる作品也『新潮』第10巻第2号 2月
〔評〕／「俳諧師」に就て『東京朝日新聞』2月5日
〔評〕／「読書と創作」『中学世界』第12巻第2号 2月
〔序〕／序 松根東洋城撰「新春夏秋冬 夏之部」俳書堂 3月5日〔評〕／明治座の所感を虚子君に問れて『国民新聞』5月15日〔評〕／「メレディスの訃」『国民新聞』5月21、22日
〔評〕／感じのいゝ人『新小説』第14年第6巻 6月〔評〕／太陽雜誌募集名家投票に就て「太陽」第15巻第9号 6月
〔評〕／長谷川君と余 坪内逍遙・内田魯庵編「二葉亭四迷」易風社 8月〔評〕／「夏の生活」『新潮』第11巻第2号 8月
〔評〕／「テニソンに就て」『国民新聞』8月6日〔評〕／「文士と八月」『国民新聞』8月10日〔評〕／「執筆 時間、時季、用具、場所、希望、経験、感想、等」『国民新聞』9月3日
〔評〕／「額の男」を読む『大阪朝日新聞』9月5日〔評〕／趣味に就て『満洲新報』9月21日〔譚〕／満韓の文明『東京朝日新聞』10月18日、〔評〕／汽車の中「国府津より新橋まで」『国民新聞』10月19日〔評〕／満韓とところどころ『東京朝日新聞』10月21日、30日〔評〕／昨日午前の日記『国民新聞』10月29日〔評〕／序 松根東洋城撰「新春夏秋冬 秋之部」俳書堂 11月〔序〕／「夢の如し」を読む『国民新聞』11月9日
〔評〕／「煤煙」の序『東京朝日新聞』11月25日〔序〕／俳諧新研究の序 樋口銅牛「俳諧新研究」隆文館 12月〔序〕／日英博覧会的美術品『東京朝日新聞』12月16日〔評〕

第6巻 明治43年〜明治44年 (1910〜1911)

〔明治43年〕東洋美術図譜『東京朝日新聞』1月5日〔評〕／客観描写と印象描写『東京朝日新聞』2月1日〔評〕／不折俳画の序 中村不折著「不折俳画」上巻 光華堂 3月〔序〕／草平氏の論文に就て『東京朝日新聞』3月18日〔評〕／文話『新国民』第11巻第1号 4月〔評〕／色気を去れよ 小川煙村・倉光空喝編「名土禪」柳枝軒書店 4月〔評〕／「二葉亭追用会」『東京朝日新聞』5月12日〔評〕／長塚節氏の小説「土」『東京朝日新聞』6月9日〔評〕／文芸とヒロイック『東京朝日新聞』7月19日〔評〕／艇長の遺書と中佐の詩『東京朝日新聞』7月20日〔評〕／鑑賞の統一と独立『東京朝日新聞』7月21日〔評〕／イズムの功過『東京朝日新聞』7月23日
〔評〕／好悪と優劣『東京朝日新聞』7月31日、8月1日
〔評〕／自然を離れんとする芸術(新日本画譜の序)『東京朝日新聞』8月13日、15日〔評〕／対話 本間久著「枯木」良明堂書店 11月〔序〕

〔明治44年〕語学養成法『学生』第2巻第1号、第2号 1月、2月〔評〕／「漱石氏訪問」『東京朝日新聞』2月25日
〔評〕／博士問題とマードック先生と余『東京朝日新聞』3月6日、8日〔評〕／「死骸となつて棄てられた学士君」『中央新聞』3月7日「インタビュ」／「勅令の解釈が違ふ」『東京朝日新聞』3月8日〔評〕／マードック先生の日本歴史『東

京朝日新聞』3月16、17日〔評〕／博士問題の成行『東京朝日新聞』4月15日〔評〕／文芸委員は何をするか『東京朝日新聞』5月18日、20日〔評〕／太平洋画会『東京朝日新聞』5月21日、22日〔評〕／田中主堂氏の「書齋より街頭へ」『東京朝日新聞』5月23日〔評〕／西洋にはない「俳味」第2巻第6号 6月
〔評〕／坪内博士と「ハムレット」『東京朝日新聞』6月5、6日〔評〕／「夏目博士座談」『高田日報』6月20日〔評〕／「猫博士と中学生」『高田日報』6月20、21日〔譚〕／我輩の見た「職業」『南信日日新聞』6月22、30日〔譚〕／教育と文芸「信濃教育」第29号 7月〔譚〕／学者と名譽『東京朝日新聞』7月14日〔評〕／「夏目漱石氏の談片」『英語青年』第25巻第8号 7月〔評〕／「稽古の歴史」『能楽』第9巻第11号 11月
〔評〕／道楽と職業『朝日講演集』朝日新聞合資会社 11月
〔譚〕／現代日本の開化『朝日講演集』朝日新聞合資会社 11月
〔譚〕／中身と形式『朝日講演集』朝日新聞合資会社 11月
〔譚〕／文芸と道徳『朝日講演集』朝日新聞合資会社 11月〔譚〕

第7巻 明治45年(大正元年)〜大正3年 (1912〜1914)

〔明治45年・大正元年〕ノラは生るゝか『国民雑誌』第3巻第3号 2月〔評〕／やつと安心『読売新聞』3月4日〔評〕／「土」に就て 長塚節著「土」春陽堂 5月〔序〕／池邊君の史論に就て 瀧田哲太郎編「明治維新 三大政治家」新潮社 5月〔序〕／余と万年筆「万年筆の印象と図解カタログ」丸善株式会社 6月〔評〕／「明治年代の著述にして不朽の生命あるもの」『読書の友』第5号 9月「アンケート」／文展と芸術『東京朝日新聞』10月15日、28日〔評〕／読書と西洋の社会『読売新聞』10月20日〔評〕／序 高原操著「極北日本」政教社 12月〔序〕

〔大正2年〕序「社会と自分」実業之日本社 2月〔序〕／「書籍と風景と色と?」『時事新報』7月7日「アンケート」／序 タマス・ブルフィンチ著「伝説の時代 神々と英雄の物語」野上弥生子訳述 尚文堂 7月〔序〕／「雅号の由来」『時事新報』10月2日「アンケート」／漱石山房より『新潮』第19巻第6号 12月〔評〕

〔大正3年〕題言 想田秋曉著「高岳」高岳文芸社 1月〔序〕／「模倣と独立」『校友会雑誌』第23号 1月〔譚〕／素人と黒人『東京朝日新聞』1月7日、12日〔評〕／序 米窪太刀雄著「海のロマンス」誠文堂書店・中興館書店 2月〔序〕／「サアン」に対する評『新文壇』第10巻第5号 2月〔譚〕／文士の生活『大阪朝日新聞』3月22日〔評〕／序 保坂婦一著「吾輩の観たる亜米利加」下篇 日米出版協会 4月〔序〕／漱石山房座談「反響」第1号 4月〔評〕／「会心の一編及一節」『読書世界』第4巻第2号 5月「アンケート」／「おはなし」『浅草文庫』第31号 5月〔譚〕／序 岡本一平著「探訪画趣」礎部甲陽堂 6月〔序〕／「趣味と好尚」『文章世界』第9巻第9号 8月「アンケート」／新進作家と其作品『新潮』第21巻第3号 9月「アンケート」

第8巻 大正4年〜大正9年 (1915〜1920)

〔大正4年〕序 木村恒著「南国へ」文芸社 2月〔序〕／序 木下太一郎著「唐草表紙」正確堂 2月〔序〕／「書齋に対する希望」『新潮』第22巻第3号 3月「アンケート」／釣鐘の好きな人「俳味」第6巻第3号 3月〔評〕／私の個人主義『現代文集』実業之世界社 3月〔譚〕／日本は何時も危険也『やまと新聞』7月22日〔評〕／猫の話絵の話『報知新聞』8月25日、26日〔評〕／序 植松安著「文芸批評論」大成堂 9月〔序〕／序 平井晩村著「野葡萄」国民書院 9月〔序〕／「新しき女の入水」『時事新報』10月9日「インタビュ」／「津田青楓氏」『美術新報』第14巻第12号 10月〔評〕／文壇のころころ『大阪朝日新聞』10月11日〔評〕／縮刷に際して「社会と自分」実業之日本社 11月〔序〕／「序」『金剛草』至誠堂 書店 11月〔序〕

〔大正5年〕点頭録『東京朝日新聞』1月1日、21日〔評〕／沙翁当時の舞台「日本及日本人」第67号 4月〔評〕／「文章初学者に与ふる十五名家の箴言」『文章俱樂部』第1巻第1号 5月「アンケート」／「風采が立派」『新潮』第25巻第1号 7月「アンケート」／文体の一長一短「日本及日本人」第68号 9月
〔評〕／題丙辰澆墨 中村不折著「不折山人 丙辰澆墨」第一集 中央出版協会 9月〔序〕／「文学に志す青年の座右銘」『文芸雑誌』第1巻第4号 10月「アンケート」

〔大正6年〕夏目先生の談片『英語青年』第36巻第9号 2月〔評〕

〔大正9年〕三愚集 秋元梧楼編「三愚集」俳画堂 7月〔序〕

註：〔翻〕翻訳 〔評〕評論(談話などを含む) 〔序〕序文 〔譚〕講演

漱石評論・講演復刻全集

A4判上製/カバー装/平均250ページ

●全8巻揃定価: 本体96,000円+税

ISBN4-8433-0762-9 C3393

■全巻構成

第1巻 明治25年～37年(1892～1904)・総論

●定価: 本体13,200円+税 ISBN4-8433-0763-7

第2巻 明治38年～39年(1905～1906)

●定価: 本体10,800円+税 ISBN4-8433-0764-5

第3巻 明治40年(1907)

●定価: 本体7,800円+税 ISBN4-8433-0765-3

第4巻 明治41年(1908)

●定価: 本体13,000円+税 ISBN4-8433-0766-1

第5巻 明治42年(1909)

●定価: 本体13,800円+税 ISBN4-8433-0767-X

第6巻 明治43年～44年(1910～1911)

●定価: 本体16,000円+税 ISBN4-8433-0768-8

第7巻 明治45年(大正元年)～大正3年(1912～1914)

●定価: 本体10,400円+税 ISBN4-8433-0769-6

第8巻 大正4年～9年(1915～1920)・漱石著作初出年譜

●定価: 本体11,000円+税 ISBN4-8433-0770-X

◎復刻全集堂々完結!

・漱石が新聞、雑誌に発表した評論、

講演など二百余点を年次別に収録。

・漱石の著作群を当時の視点で読むこと

を可能にする復刻全集三部作の完成。

漱石復刻全集 好評既刊

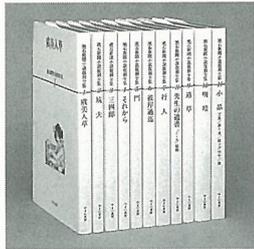
◎漱石文学の原点。新聞本文、雑誌本文の決定版!

漱石新聞小説復刻全集

[監修] 山下 浩 A4判上製/カバー装

●全11巻揃定価: 本体98,400円+税

朝日新聞に掲載された漱石の小説作品を網羅した漱石新聞小説の決定版。原紙の姿を可能な限り再現。鮮明な画面で大阪版との異同を記し、解題を付す。
〈全巻構成〉①虞美人草②坑夫③三四郎④それから⑤門⑥彼岸過迄⑦行人⑧先生の遺書⑨道草⑩明暗⑪小品・解題

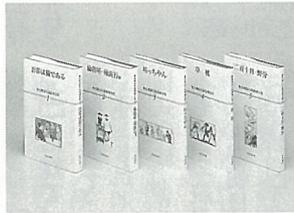


漱石雑誌小説復刻全集

[監修] 山下 浩 菊判上製/カバー装

●全5巻揃定価: 本体48,000円+税

同一初出誌を多数校合、欠字等を補訂した決定版。比較校合の結果及び底本選定の経緯を記した解題を作品ごとに執筆、論文



「漱石の雑誌小説本文について」を3巻に収録。
〈全巻構成〉①吾輩は猫である②倫敦塔・薙露行他③坊っちゃん④草枕⑤二十十日・野分



〒101-0047
東京都千代田区内神田2-7-6
TEL.03 (5296) 0491
FAX.03 (5296) 0493
http://www.yumani.co.jp/
e-mail eigyou@yumani.co.jp

ゆまに書房 Tel.03 (5296) 0491/Fax.03 (5296) 0493 年 月 日

※毎度ありがとうございます。お申し込みはぜひ当店へ。

ご注文書

漱石評論・講演復刻全集 全8巻

●定価: 本体96,000円+税 ISBN4-8433-0762-9 C3393

セット

取扱店

お名前
住所

TEL ()